煙管

芥川龍之介

一

加州石川郡金沢城の城主、前田斉広は、参覲中、江戸城の本丸へ登城する毎に、必ず愛用の煙管を持って行った。当時有名な煙管商、住吉屋七兵衛の手に成った、金無垢地に、剣梅鉢の紋ぢらしと云う、数寄を凝らした煙管である。

前田家は、幕府の制度によると、五世、加賀守綱紀以来、大廊下詰で、席次は、世々尾紀水三家の次を占めている。勿論、裕福な事も、当時の大小名の中で、肩を比べる者は、ほとんど、一人もない。だから、そ

の当主たる斉広が、金無垢の煙管を持つと云う事は、寧ろ身分相当の装飾品を持つのに過ぎないのである。

しかし斉広は、その煙管を持っている事を甚だ、得意に感じていた。もっとも断って置くが、彼の得意は決して、煙管そのものを、どんな意味ででも、愛翫したからではない。彼はそう云う煙管を日常口にし得る彼自身の勢力が、他の諸侯に比して、優越な所以を悦んだのである。つまり、彼は、加州百万石が金無垢の煙管になって、どこへでも、持って行けるのが、得意だった――と云っても差支えない。

そう云う次第だから、斉広は、登城している間中、

殆どその煙管を離した事がない。人と話しをしている時は勿論、独りでいる時でも、彼はそれを懐中から出して、鷹揚（おうよう）に口に啣（くわ）えながら、長崎煙草（ながさきたばこ）か何かの匂いの高い煙りを、必ず悠々とくゆらせている。

勿論この得意な心もちは、煙管なり、それによって代表される百万石なりを、人に見せびらかすほど、増長慢（ぞうちょうまん）な性質のものではなかったかも知れない。が、彼自身が見せびらかさないまでも、殿中（でんちゅう）の注意は、明かに、その煙管に集注されている観があった。そうして、その集注されていると云う事を意識するのが斉広にとっては、かなり愉快な感じを与えた。——現に彼

には、同席の大名に、あまりお煙管が見事だからちょいと拝見させて頂きたいと、云われた後（あと）では、のみなれた煙草の煙までがいつもより、一層快く、舌を刺戟（しげき）するような気さえ、したのである。

二

斉広（なりひろ）の持っている、金無垢（きんむく）の煙管（きせる）に、眼を駭（おどろ）かした連中の中で、最もそれを話題にする事を好んだのは所謂（いわゆる）、お坊主（ぼうず）の階級である。彼等はよるとさわると、鼻をつき合せて、この「加賀の煙管」を材料に得意の

饒舌（じょうぜつ）を闘わせた。

「さすがは、大名道具だて。」

「同じ道具でも、ああ云う物は、つぶしが利（き）きやす。」

「質（しち）に置いたら、何両貸す事かの。」

「貴公じゃあるまいし、誰が質になんぞ、置くものか。」

ざっと、こんな調子である。

するとある日、彼等の五六人が、円（まる）い頭をならべて、一服やりながら、例の如く煙管の噂（うわさ）をしていると、そこへ、偶然、御数寄屋坊主（おすきやぼうず）の河内山宗俊（こうちやまそうしゅん）が、やって来た。――後年（こうねん）「天保六歌仙（てんぽうろっかせん）」の中の、主なrôleをつとめる事になった男である。

「ふんまた煙管か。」
河内山は、一座の坊主を、尻眼にかけて、空嘯（そらうそぶ）いた。
「彫（ほり）と云い、地金（じがね）と云い、見事な物さ。銀の煙管さえ持たぬこちとらには見るも眼の毒……」
調子にのって弁じていた了哲（りょうてつ）と云う坊主が、ふと気がついて見ると、宗俊は、いつの間にか彼の煙管入れをひきよせて、その中から煙草をつめては、悠然と煙を輪にふいている。
「おい、おい、それは貴公の煙草入れじゃないぜ。」
「いいって事よ。」
宗俊は、了哲の方を見むきもせずに、また煙草をつ

めた。そうして、それを吸ってしまうと、生あくびを一つしながら、煙草入れをそこへ抛り出して、
「ええ、悪い煙草だ。煙管ごのみが、聞いてあきれるぜ。」
了哲は慌てて、煙草入れをしまった。
「なに、金無垢の煙管なら、それでも、ちょいとのめようと云うものさ。」
「ふんまた煙管か。」と繰返して、「そんなに金無垢が有難けりゃ何故お煙管拝領と出かけねえんだ。」
「お煙管拝領？」
「そうよ。」

さすがに、了哲も相手の傍若無人（ぼうじゃくぶじん）なのにあきれたらしい。

「いくらお前、わしが欲ばりでも、……せめて、銀ででもあれば、格別さ。……とにかく、金無垢だぜ。あの煙管は。」

「知れた事よ。金無垢ならばこそ、貰うんだ。真鍮（しんちゅう）の駄六（だろく）を拝領に出る奴がどこにある。」

「だが、そいつは少し恐れだて。」

了哲はきれいに剃（そ）った頭を一つたたいて恐縮したような身ぶりをした。

「手前が貰わざ、己（おれ）が貰う。いいか、あとで羨（うらやま）しが

るなよ。」

河内山はこう云って、煙管をはたきながら肩をゆすって、せせら笑った。

三

それから間もなくの事である。

斉広（なりひろ）がいつものように、殿中（でんちゅう）の一間で煙草をくゆらせていると、西王母（せいおうぼ）を描いた金襖（きんぶすま）が、静に開（あ）いて、黒手（くろで）の黄八丈（きはちじょう）に、黒の紋附（もんつき）の羽織を着た坊主が一人、恭（うやうや）しく、彼の前へ這って出た。顔を上げずにいるの

で、誰だかまだわからない。――斉広は、何か用が出来たのかと思ったので、煙管（きせる）をはたきながら、寛濶（かんかつ）に声をかけた。

「何用じゃ。」

「ええ、宗俊（そうしゅん）御願がございまする。」

河内山（こうちやま）はこう云って、ちょいと言葉を切った。それから、次の語を云っている中に、だんだん頭（かしら）を上げて、しまいには、じっと斉広の顔を見つめ出した。こう云う種類の人間のみが持って居る、一種の愛嬌（あいきょう）をたたえながら、蛇が物を狙うような眼で見つめたのである。

「別儀でもございませんが、その御手許にございます

る御煙管を、手前、拝領致しとうございまする。」

　斉広は思わず手にしていた煙管を見た。その視線が、煙管へ落ちたのと、河内山が追いかけるように、語を次いだのとが、ほとんど同時である。

「如何(いかが)でございましょう。拝領仰せつけられましょうか。」

　宗俊の語の中(うち)にあるものは懇請の情ばかりではない、お坊主(ぼうず)と云う階級があらゆる大名に対して持っている、威嚇(いかく)の意も籠(こも)っている。煩雑な典故(てんこ)を尚(とうと)んだ、殿中では、天下の侯伯も、お坊主の指導に従わなければならない。斉広には一方にそう云う弱みがあった。それ

からまた一方には体面上卑吝(ひりん)の名を取りたくないと云う心もちがある。しかも、彼にとって金無垢の煙管そのものは、決して得難い品ではない。――この二つの動機が一つになった時、彼の手は自(おのずか)ら、その煙管を、河内山の前へさし出した。

「おお、とらす。持ってまいれ。」

「有難うございまする。」

宗俊は、金無垢の煙管をうけとると、恭しく押頂(おしいただ)いて、そこそこ、また西王母の襖(ふすま)の向うへ、ひき下った。すると、ひき下る拍子に、後(うしろ)から袖を引いたものがある。ふりかえると、そこには、了哲(りょうてつ)が、うすいものあ

る顔をにやつかせながら、彼の掌（てのひら）の上にある金無垢の煙管をもの欲しそうに、指さしていた。

「こう、見や。」

河内山は、小声でこう云って、煙管の雁首（がんくび）を、了哲の鼻の先へ、持って行った。

「とうとう、せしめたな。」

「だから、云わねえ事じゃねえ。今になって、羨（うらや）ましがったって、後（あと）の祭だ。」

「今度は、私（わし）も拝領と出かけよう。」

「へん、御勝手（ごかって）になせえましだ。」

河内山は、ちょいと煙管の目方をひいて見て、それ

から、襖ごしに斉広の方を一瞥（いちべつ）しながら、また、肩をゆすってせせら笑った。

四

では、煙管（きせる）をまき上げられた斉広（なりひろ）の方は、不快に感じたかと云うと、必しもそうではない。それは、彼が、下城（げじょう）をする際に、いつになく機嫌（きげん）のよさそうな顔をしているので、供（とも）の侍たちが、不思議に思ったと云うのでも、知れるのである。

彼は、むしろ、宗俊に煙管をやった事に、一種の満

足を感じていた。あるいは、煙管を持っている時よりも、その満足の度は、大きかったかも知れない。しかしこれは至極当然な話である。何故と云えば、彼が煙管を得意にするのは、前にも断ったように、煙管そのものを、愛翫するからではない。実は、煙管の形をしている、百万石が自慢なのである。だから、彼のこの虚栄心は、金無垢の煙管を愛用する事によって、満足させられると同じように、その煙管を惜しげもなく、他人にくれてやる事によって、更によく満足させられる訳ではあるまいか。たまたまそれを河内山にやる際に、幾分外部の事情に、強いられたような所があった

にしても、彼の満足が、そのために、少しでも損ぜられる事なぞはないのである。

そこで、斉広は、本郷の屋敷へ帰ると、近習の侍に向って、愉快そうにこう云った。

「煙管は宗俊の坊主にとらせたぞよ。」

五

これを聞いた家中の者は、斉広の宏量なのに驚いた。しかし御用部屋の山崎勘左衛門、御納戸掛の岩田内蔵之助、御勝手方の上木九郎右衛門――この三人の

役人だけは思わず、眉（まゆ）をひそめたのである。

加州一藩の経済にとっては、勿論、金無垢の煙管（きせる）一本の費用くらいは、何でもない。が、賀節（がせつ）朔望（さくぼう）二十八日の登城（とじょう）の度に、必ず、それを一本ずつ、坊主たちにとられるとなると、容易ならない支出である。あるいは、そのために運上（うんじょう）を増して煙管の入目（いりめ）を償（つぐな）うような事が、起らないとも限らない。そうなっては、大変である——三人の忠義の侍は、皆云い合せたように、それを未然に惧（おそ）れた。

そこで、彼等は、早速評議を開いて、善後策を講じる事になった。善後策と云っても、勿論一つしかない。

――それは、煙管の地金（じがね）を全然変更して、坊主共の欲しがらないようなものにする事である。が、その地金を何にするかと云う問題になると、岩田と上木とで、互に意見を異にした。

　岩田は君公の体面上銀より卑（いや）しい金属を用いるのは、異（い）なものであると云う。上木はまた、すでに坊主共の欲心を防ごうと云うのなら、真鍮（しんちゅう）を用いるのに越した事はない。今更体面を、顧慮する如きは、姑息（こそく）の見（けん）であると云う。――二人は、各々、自説を固守して、極力論駁（ろんばく）を試みた。

　すると、老功な山崎が、両説とも、至極道理がある。

が、まず、一応、銀を用いて見て、それでも坊主共が欲しがるようだったら、その後に、真鍮を用いても、遅くはあるまい。と云う折衷説（せっちゅうせつ）を持出した。これには二人とも、勿論、異議のあるべき筈がない。そこで評議は、とうとう、また、住吉屋（すみよしや）七兵衛に命じて銀の煙管を造らせる事に、一決した。

六

斉広（なりひろ）は、爾来（じらい）登城する毎に、銀の煙管（きせる）を持って行った。やはり、剣梅鉢（けんうめばち）の紋ぢらしの、精巧を極めた煙管

である。

彼が新調の煙管を、以前ほど、得意にしていない事は勿論である。第一人と話しをしている時でさえ滅多に手にとらない。手にとっても直（すぐ）にまたしまってしまう。同じ長崎煙草が、金無垢の煙管でのんだ時ほど、うまくないからである。が、煙管の地金（じがね）の変った事は独り斉広の上に影響したばかりではない。三人の忠臣が予想した通り、坊主共（ぼうずども）の上にも、影響した。しかし、この影響は結果において彼等の予想を、全然裏切ってしまう事に、なったのである。何故と云えば坊主共は、金が銀に変ったのを見ると、今まで金無垢なるが故に、

遠慮をしていた連中さえ、先を争って御煙管拝領に出かけて来た。しかも、金無垢の煙管にさえ、愛着（あいじゃく）のなかった斉広が、銀の煙管をくれてやるのに、未練（みれん）のあるべき筈はない。彼は、請われるままに、惜し気もなく煙管を投げてやった。しまいには、登城した時に、煙管をやるのか、煙管をやるために登城するのか、彼自身にも判別が出来なくなった――少くともなったくらいである。

これを聞いた、山崎、岩田、上木の三人は、また、愁眉（しゅうび）をあつめて評議した。こうなっては、いよいよ上木の献策通り、真鍮の煙管を造らせるよりほかに、仕

方がない。そこで、また、例の如く、命が住吉屋七兵衛へ下（くだ）ろうとした――丁度、その時である。一人の近習（きんじゅ）が斉広の旨を伝えに、彼等の所へやって来た。

「御前（ごぜん）は銀の煙管を持つと坊主共の所望がうるさい。以来従前通り、金の煙管に致せと仰せられまする。」

三人は、唖然（あぜん）として、為す所を知らなかった。

七

河内山宗俊（こうちやまそうしゅん）は、ほかの坊主共が先を争って、斉広（なりひろ）の銀の煙管（きせる）を貰いにゆくのを、傍（かたわら）痛（いた）く眺めていた。こ

とに、了哲（りょうてつ）が、八朔（はっさく）の登城の節か何かに、一本貰って、嬉しがっていた時なぞは、持前の癇高（かんだか）い声で、頭から「莫迦（ばか）め」をあびせかけたほどである。彼は決して銀の煙管が欲しくない訳ではない。が、ほかの坊主共と一しょになって、同じ煙管の跡を、追いかけて歩くには、余りに、「金箔（きんぱく）」がつきすぎている。その高慢と欲との鬩（せめ）ぎあうのに苦しめられた彼は、今に見ろ、己（おれ）が鼻を明かしてやるから——と云う気で、何気ない体（てい）を装いながら、油断なく、斉広の煙管へ眼をつけていた。

　すると、ある日、彼は、斉広が、以前のような金無垢の煙管で悠々と煙草をくゆらしているのに、気がつ

いた。が、坊主仲間では誰も貰いに行くものがないらしい。そこで彼は折から通りかかった了哲をよびとめて、そっと顋（あご）で斉広の方を教えながら囁（ささや）いた。

「また金無垢になったじゃねえか。」

了哲はそれを聞くと、呆（あき）れたような顔をして、宗俊を見た。

「いい加減に欲ばるがいい。銀の煙管でさえ、あの通りねだられるのに、何で金無垢の煙管なんぞ持って来るものか。」

「じゃあれは何だ。」

「真鍮だろうさ。」

宗俊は肩をゆすった。四方(あたり)を憚(はばか)って笑い声を立てなかったのである。

「よし、真鍮なら、真鍮にして置け。己(おれ)が拝領と出てやるから。」

「どうして、また、金だと云うのだい。」了哲の自信は、怪しくなったらしい。

「手前たちの思惑(おもわく)は先様(さきさま)御承知でよ。真鍮と見せて、実は金無垢を持って来たんだ。第一、百万石の殿様が、真鍮の煙管を黙って持っている筈がねえ。」

宗俊は、口早にこう云って、独り、斉広の方へやって行った。あっけにとられた了哲を、例の西王母(せいおうぼ)の金

襖の前に残しながら。
それから、半時ばかり後である。了哲は、また畳廊下で、河内山に出っくわした。
「どうしたい、宗俊、一件は。」
「一件た何だ。」
了哲は、下唇をつき出しながら、じろじろ宗俊の顔を見て、
「とぼけなさんな。煙管の事さ。」
「うん、煙管か。煙管なら、手前にくれてやらあ。」
河内山は懐から、黄いろく光る煙管を出したかと思うと、了哲の顔へ抛りつけて、足早に行ってしまった。

了哲は、ぶつけられた所をさすりながら、こぼしこぼし、下に落ちた煙管を手にとった。見ると剣梅鉢(けんうめばち)の紋ぢらしの数寄(すき)を凝(こ)らした、——真鍮の煙管である。彼は忌々(いまいま)しそうに、それを、また、畳の上へ抛り出すと、白足袋(しろたび)の足を上げて、この上を大仰(おおぎょう)に踏みつける真似をした。……

八

それ以来、坊主が斉広(なりひろ)の煙管(きせる)をねだる事は、ぱったり跡を絶ってしまった。何故と云えば、斉広の持って

いる煙管は真鍮だと云う事が、宗俊と了哲とによって、一同に証明されたからである。

そこで、一時、真鍮の煙管を金と偽（いつわ）って、斉広を欺（あざむ）いた三人の忠臣は、評議の末再び、住吉屋七兵衛に命じて、金無垢の煙管を調製させた。前に河内山にとられたのと寸分もちがわない、剣梅鉢の紋ぢらしの煙管である。――斉広はこの煙管を持って内心、坊主共にねだられる事を予期しながら、揚々として登城した。

すると、誰一人、拝領を願いに出るものがない。前に同じ金無垢の煙管を二本までねだった河内山さえ、じろりと一瞥を与えたなり、小腰をかがめて行ってし

まった。同席の大名は、勿論拝見したいとも何とも云わずに、黙っている。斉広には、それが不思議であった。

いや、不思議だったばかりではない。しまいには、それが何となく不安になった。そこで彼はまた河内山の来かかったのを見た時に、今度はこっちから声をかけた。

「宗俊、煙管をとらそうか。」

「いえ、難有うございますが、手前はもう、以前に頂いて居りまする。」

宗俊は、斉広が翻弄するとでも思ったのであろう。

丁寧な語の中に、鋭い口気を籠めてこう云った。

斉広はこれを聞くと、不快そうに、顔をくもらせた。長崎煙草の味も今では、口にあわない。急に今まで感じていた、百万石の勢力が、この金無垢の煙管の先から出る煙の如く、多愛なく消えてゆくような気がしたからである。……

古老の伝える所によると、前田家では斉広以後、斉泰も、慶寧も、煙管は皆真鍮のものを用いたそうである、事によると、これは、金無垢の煙管に懲りた斉広が、子孫に遺誡でも垂れた結果かも知れない。

（大正五年十月）

底本：「芥川龍之介全集1」ちくま文庫、筑摩書房
1986（昭和61）年9月24日第1刷発行
1995（平成7）年10月5日第13刷発行
底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房
1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月
入力：j.utiyama
校正：earthian
1998年11月11日公開
2004年3月8日修正

青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。